

【研究の概要】

プロジェクト研究名：内視鏡摘除後大腸 SM 癌の転移・再発に関する多施設共同研究 (後向きアンケート調査)

I. 研究目的

【大腸癌治療ガイドラインの妥当性】

大腸癌治療ガイドライン 2005 年度版、及び大腸癌取り扱い規約における大腸 SM 癌内視鏡摘除後の追加腸切除考慮基準について、これまでの中期経過からのその妥当性については十分な評価を得ている。

【大腸癌治療ガイドラインの問題点】

その中で、大腸 SM 癌内視鏡摘除後の追加腸切除が考慮される場合、依然として oversurgery となっているという問題点も指摘されている。その理由として、仮に追加腸切除を行わずに経過をみて転移や再発を生じた際の追加腸切除などの salvage 治療により、根治、または予後の改善が可能か、というエビデンスが得られていないからである。そのため再発の危険性が少しでもある場合、積極的に追加腸切除を行わざるを得ないという現状がみられている。

【大腸 SM 癌治療後経過の現状】

他方、これまで内視鏡技術の進歩や SM 癌の集積によるその病態解明が進み、多くの大腸 SM 癌が内視鏡的に摘除されるようになり、患者の全身の合併症や希望などにより追加手術を施行せず経過観察にまわる症例が増加しつつある。その経過観察中に転移や再発する症例も散見される。また、外科的切除を行った大腸 SM 癌においても、希ではあるが転移再発をきたすものがある。

【本プロジェクト研究の目的・期待される結果】

これら背景の中で、内視鏡摘除後経過観察となった大腸 SM 癌が再発した症例の予後（追加治療の効果）については単独施設での症例は非常に少ないため、エビデンスはほとんどなく、本プロジェクト研究でそのデータの構築を目指す。また、内視鏡摘除単独あるいは内視鏡摘除 + 追加手術後に再発した病変の臨床病理学的特徴と再発様式・臨床経過を解析するとともに、内視鏡摘除後経過観察中に転移・再発した症例に対する Salvage 治療の有効性を明らかにすることを目的とする。後向きアンケート調査ではあるが、内視鏡摘除後経過観察中に転移・再発した症例の Salvage 治療の成績や生命予後が客観的データとして明らかになり、その情報をガイドラインに盛り込めるとともに、実臨床で患者に説明することが可能となる。その結果、大腸 SM 癌の治療法選択における正しい患者の理解、大腸 SM 癌内視鏡摘除後の患者の予後改善など多大なる貢献が得られることが期待される。

II. プロジェクト委員

委員長 市立旭川病院消化器病センター 齊藤裕輔

臨床系委員

広島大学病院内視鏡診療科 (副委員長)	田中信治
広島大学病院内視鏡診療科 (事務局)	岡 志郎
国立がん研究センター中央病院内視鏡部	齊藤 豊
国立がん研究センター東病院内視鏡部	池松弘朗
がん研有明病院内視鏡診療部	五十嵐正広

昭和大学横浜市北部病院消化器センター	和田祥城 / 工藤進英
北里大学東病院消化器内科	小林清典
東京女子医大消化器病センター	井上雄志
慶応大学腫瘍センター	浦岡俊夫
大阪府立成人病センター消化管内科	飯石浩康
秋田赤十字病院胃腸センター	山野泰穂
久留米大学第二内科	鶴田 修
広島市立安佐市民病院内視鏡内科	永田信二
松山赤十字病院胃腸センター	蔵原晃一
静岡県立がんセンター病院内視鏡科	山口 裕一郎
佐野病院消化器センター	佐野 寧
近畿大学消化器内科	櫻田博史
京都大学消化器内科	堀松高博
東京慈恵会医科大学内視鏡科	斉藤彰一
東京大学腫瘍外科	渡辺聡明
防衛医科大学校外科	上野秀樹
東京医科歯科大学腫瘍外科	石黒めぐみ
京都府立医科大学	石川秀樹

病理系委員

新潟大学分子・診断病理	味岡洋一
杏林大学病理学	大倉康男
独協医科大学病理学	藤盛孝博

III. 研究・調査方法

内視鏡摘除単独または内視鏡摘除後追加腸切除で治療を行った大腸 SM 癌のうち 2001 年から 2008 年の間に再発した病変において大腸癌研究会施設会員全施設に以下の項目につき後向きアンケート調査を行い、症例を収集し解析を行う

1. 病変の臨床的特徴
2. 病変の病理学的特徴
3. 再発様式
4. 追加治療内容
5. 臨床経過
6. 生命予後

IV. 研究期間

2013.1-2015.1 (2 年間)

V. 調査期間

2013.4-2014.3 (1 年間)